慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	韓愈と洛陽 : 元和元年初期に於ける吏隱の狭間
Sub Title	Han Yü and Luo Yung
Author	和田, 浩平(Wada, Kohei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1993
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.63, (1993. 3) ,p.306- 328
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松原秀一教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00630001-0306

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

韓愈と洛陽
――元和年間初期に於ける吏隱の狭間――

和田浩平

一

韓愈（七六八―八二四）が陽山（広東省）へ貶斥された後に中央の長安の地を権知四門博士として再び踏んだのは元和元年のことであった。しかし、韓愈が長安に実質的に長く腰を据えることになるのは、尚書職方員外郎の地位を得た元和六年以降のことである。

この間、つまり元和二年から元和五年（韓愈四十歳から四十三歳）の間と言えば、韓愈は東都洛陽を中心に活動をしており、所謂る洛陽勤務の時期に相当する。

この洛陽勤務については、韓愈の年譜に「願い出て洛陽勤務となる」[1]とその足跡が刻まれることもある如く、それは彼の積極的意向に基づくものであった。この年譜の示し方は、陽山への左遷という寒流の身分から帰り咲き、再び中央の潮流に乗り始めた韓愈への中傷が再燃した様子を歌った「剝啄行」（本稿に於ける韓愈詩の底本には、錢仲聯の『韓昌

黎詩繫年集釋』を用いる。この詩はその巻六に収められている。以下詩については集釋巻某の形で示す。）という詩、李翺の「韓吏部行狀」[2]また宋の洪興祖の『韓子年譜』[3]などに依拠するものと思われる。

確かに、この元和初期に於ける韓愈のこの特異な行動、処世というものは、政治的な理由に由るものと見てよかろう。しかし、そもそも洛陽に於ける生活は、これから明らかにしていくように、同時に韓愈個人の志向にも十分見合うものでもあったのである。そして、この洛陽に於いて望む生活とは、隠居をすることであった。

本稿は「韓愈と洛陽」と題し、副題として「元和年間初期に於ける吏隠の狭間」と示したのは、こうした仕官と隠居との狭間に於ける韓愈の処世、生き方の典型を元和年間初期の洛陽に於ける彼の生活の中に見出したからである。以下の考察によりそれを明らかにしてゆきたい。

二

韓愈は長慶四年に長安の靖安里で五十七歳で卒し、彼と同時代の白居易（七七二―八四六）は、太和元年に蘇州刺史から戻って以来の十八年間、洛陽を退休の地とした形の生活をおくり、この地の履道里で七十五歳の生涯を終えた。この二人が卒した長安と洛陽の地は、それぞれ二人の志向の違いをよく反映したものと考えられる。

しかし韓愈が長安でその一生を閉じたからとはいえ、彼が洛陽を好まなかったということを意味するわけではない。志向の性質と比重はそれぞれ異なるとしても、洛陽が韓愈の生涯で関った時間は多く、重要な場であったことは変わらない。韓愈は洛陽を離れていても洛陽のことをしばしば口にした。このことは、彼の洛陽への思いの強さを自ずと示している。今それが表れた詩文を読むことにする。

貞元十八年、韓愈が長安で四門博士の任にあったころ、彼は友人の崔羣に「與崔羣書」〔崔羣に与うるの書〕（文章の底本には、清の馬其昶の『韓昌黎文集校注』を用いる。この文章は、その巻三に収められている。以下文章については校注巻某の形で示す。）という手紙を書いた。崔羣は韓愈と同じく貞元八年の進士。彼はこの時、洛陽を去って宣州（安徽省）の判官になっていた。今、この文章を読むと韓愈の洛陽への基本的姿勢、及びしたたかな思いがわかる。次にそれが明らかな部分を引用する。

僕無以自全活者、從一官於此、轉困窮甚。思自放於伊潁之上、當亦終得之。近者尤衰憊、左車第二牙無故動搖脫去。目視昏花、尋常間便不分人顏色。兩鬢半白、頭髮五分亦白其一、鬚亦有一莖兩白者。僕家不幸、諸父諸兄皆康彊早世、如僕者又可以圖於久長哉。以此忽忽思與足下相見一道其懷。小兒女滿前、能不顧念。足下何由得歸北來。僕不樂江南。官滿便終老嵩下、足下可相就。僕不可去矣。

私は生活が成り立たないので、ここ長安で一つの官職についていますが、いっそうひどく窮乏しています。伊水、潁水のほとりに自由にくらしたいと思っていますが、いずれはそうしたいものです。近ごろとりわけ衰えがひどく、左下顎の第二大臼歯がどういうわけかぐらついて抜け落ちました。目もちらちらかすんで、すぐ近くのところでさえ人の顔つきがわかりません。両方の鬢の毛は半分白く、頭髪も五分の一が白くなり、ひげにも一本二本白いものがまじっています。私の家族は不幸なもので、おじたちや兄たちはみな健康であったのに早くなくなりました。私などは長生きすると考えられましょうか。そういうわけで、あなたにお目にかかって懐いを一度うちあけたいとふと思いました。小さなむすこ、むすめが私にはいっぱいいます。心配しないでおられましょうか。あなたはどうすれば北方へ帰還できますか。私は江南がきらいです。任期が満ちたら、嵩山のふもとで死ぬまで隠居したいと思っ

ています。あなたはそこへおいで下さい。私はここを離れられません。[4]

この文章については『韓昌黎文集校注』で馬其昶が引く清の劉大櫆の評語に「公、崔と最も相い知る、故に此の家常本色の言有り」とある如く、文章中に韓愈の率直な気持ちが表現されたと見てよかろう。

そしてその気持ちは、現在を顧みた上での不安と将来への希望とから成る。前者は生活の窮乏ゆえに官職に就く必要性を自覚し、一方で歯目髪などの肉体的衰弱にも悩まされる現況を自覚した死への不安である。後者は伊水、潁水、嵩山という洛陽の山川での隠居生活、及び嵩山へ崔羣が来てくれることへの希望である。不安と希望、この二者は相入れないものである。が、ここではその不安を希望に結びつけていく具体的な解決策が示されているわけではない。とすれば、この前向きにして率直な文章の中に、韓愈の平生に於ける生き方が示されていると考えられる。いずれにしてもその生き方は、洛陽での隠居生活を、現在の自分の限界を洞察しながら遠くから希求したものであり、現実を確かに把握した生き方であったと思われる。

ところで、この書簡の冒頭の近くにはまた次の如き言い方が見える。

無入而不自得、樂天知命者、固前修之所以禦外物者也。況足下度越此等百千輩、豈以出處近遠累其靈臺邪。

どこへ行っても満足を感じ、天を楽しみ命を知っていることは、もとより先賢が外物の迷いを防ごうとされた方法であります。まして、あなたはその人たち何千何百人よりもはるかに越えておられるのですから、出処進退任地の遠近で心をわずらわされることはありますまい。

ここでは、洛陽を離れた崔羣が天命を心のより所として出処進退をする人物と述べられている。してみると、ここで言うこの崔羣の身の処し方こそ、この時の韓愈が不安を解消する上で唯一模範とすべきものであったのではなかろうか。

この点を考慮して韓愈の生き方を推測すると、現在では自分の現実生活と乖離してしまう隠居生活も、天を楽しみ命を知る生き方を真摯に続けていれば、それは限界の中にも現実性を帯びてくる。こう韓愈は考えていたのではないだろうか。

この天命をより所として自己の限界を悟り、洛陽の自然に自分の生活を求めるという構図は、貞元十九年に、これもまた洛陽を離れた陽山の地で作られた「祭十二郎文」〔十二郎を祭る文〕（校注巻五）に「所謂る天という者誠に測り難うして……中略……今より以往、吾れ其れ人世に意無し。當に數頃の田を伊潁の上に求めて、以て餘年を待つべし。」とあるのとほぼ同じである。

こうした洛陽の自然への言及に際し、韓愈が見せる精神の自律を天命に求める姿勢、及び吏と隠それぞれの限界を睥睨する態度というものは、文章のみならず、おそらく詩を読む場合にも注意してよい。

元和元年、江陵で作られた「憶昨行和張十一」〔憶昨行、張十一に和す〕（集釋巻四）という七言古詩にも洛陽の自然は歌われる。

嵩山東頭伊洛岸　嵩山の東頭 伊洛の岸
勝事不假須穿栽　勝事 穿栽を須うるを仮らず。
君當先行我待滿　君は当に先行すべく 我は満を待つ
沮溺可繼窮年推　沮溺 継ぐべし 年を窮めて推せん。(5)

第三句の君とは、韓愈とともに南方へ流された張署のこと。帰還途上の江陵に於いても張署は韓愈とともに属官を務めた。今、先に長安に帰ることになったこの張署に対して、韓愈は嵩山、伊水、洛水での再会を願う。詩の要旨は、洛

陽の山水の景勝はあれこれ言うまでもなくすばらしいので、わたくし韓愈は任期が満ち次第そこに行こう、張署君もいっしょに長沮や桀溺の如き耦耕生活をして余生をすごそうというものである。一読して明らかであるが、ここには自分の限界が語られているわけではない。また「天」という言葉も見えない。しかし、『韓昌黎詩繫年集釋』に於いて錢仲聯が引く朱彝尊の評語に「敍し得て亦た朗快」とある如く、この詩に見える伸びやかな調子は、やはり精神のバランスを得てこそ成り立つものであろう。

韓愈が洛陽を離れてもなおその山川を慕った詩として、他にも「將歸贈孟東野房蜀客」（集釋巻二、貞元十七年、長安）「懸齋有懷」（集釋巻二、貞元二十一年、陽山）「寄崔二十六立之」（集釋巻八、元和七年、長安）「過襄城」（集釋巻十、元和十二年、襄城）などがあり、これらの詩にも隠居への志向が強く見られる。しかし単なる願いではなく、自律した精神にもとづき、それらが自己の限界を認識して作られたものであると考えるとき、韓愈は洛陽の外に身を置きながらも、常に洛陽をしたたかに見つめていたと言えるだろう。

ところで、白居易もまた洛陽を離れていて洛陽のことに言及するのをやめなかった。長慶三年、彼が杭州刺史であったころの詩、「奉和李大夫題新詩二首各六韻」〔李大夫が新詩二首を題せるに和し奉る各々六韻〕（白居易の詩の底本には平岡武夫、今井清編『白氏文集歌詞索引』同朋舎一九八九の第三冊「白氏文集歌詞篇」を用いた。この詩の作品番号は一三八三）の第一首「因嚴亭」には次の四句が見える。

箕潁人窮獨　　箕潁は人窮独
蓬壺路阻難　　蓬壺は路阻難
何如兼吏隱　　何ぞ如かん吏隱を兼ね

復得事躋攀　復た躋攀を事とするを得るに。

この四句を解すると「箕山、潁水は窮独の人がいるところで、蓬萊は路遠く険難なところである。そこに住む隠者も仙人も君（李大夫）が吏と隠とを兼ねて、この因巌亭に登攀することになるのには及ばない」となる。既に明らかであるが、ここでは隠者と仙人の世界が現実から遠いものとして扱われ、吏隠を融合して中庸を得るのが善しとされている。

この白居易の詩には、仕官と隠居とを冷静に割り切った観があるが、韓愈詩にはそれが見出せない。

また、白居易が宝暦元年に蘇州で作った詩「歳暮寄微之三首」〔歳暮微之に寄す三首〕の第三首（作品番号二四五二）には「雖欠結廬嵩洛下、一時歸去作閑人」〔廬を嵩洛の下に結ぶを欠くと雖も、一時に帰り去って閑人と作らん〕という二句が見えるが、韓愈詩には、こういう嵩山や洛水を突き放す姿勢も見出せない。

このように洛陽を離れて歌われた詩という視点で、白居易と韓愈の作品を読み比べてみると、韓愈詩に顕著な特長は、洛陽への隠居を望む姿勢が強く見られる一方で、仕官という現実への対応が曖昧になっているという点である。嵩山・洛水・潁水などの山川自然もそのために題材として一歩退いた形で冷たく扱われることはない。

この相違はおそらく韓愈と白居易の資質の違いに由るもので、そのために洛陽の自然に対する志向の表現の仕方も異ってくるのだろう。仕官と隠居との狭間に立ってクールに自己の限界を示す詩は韓愈には見えない。しかし、実際の韓愈の姿勢は「與崔羣書」に見えたようにしたたかなものであり、本質的には白居易の場合とさほど変らないものと思われる。現実を顧みないかに見える韓愈詩は、むしろ逆に吏隠の間での心の相克をよく伝えていると言えるのかもしれない。

三

元和初期の洛陽勤務。それは東都を離れてもなお強くこの地を望んでいた韓愈のささやかな実現を見た時期であった。彼がこの機に見出した石洪（七七一―八一二）温造（七六六―八三五）李渤（七七三―八三一）らの山人たち。彼らはおそらく韓愈が憧憬する生活の具現者であった。しかし、彼らへの韓愈の評価は厳しい。

元和六年、韓愈が河南県令の任にあったころ、「寄盧仝」〔盧仝に寄す〕（集釋巻七）という詩をつくり、この三人の山人について次のように言う。

水北山人得名聲　水北の山人（石洪）名声を得たり
去年去作幕下士　去年去って幕下の士と作る。
水南山人又繼往　水南の山人（温造）又た継いで往き
鞍馬僕從塞閭里　鞍馬僕従　閭里に塞がる。
少室山人索價高　少室の山人（李渤）価を索むること高く
兩以諫官徵不起　両たび諫官を以て徴せども起たず。
彼皆刺口論世事　彼れ皆な口に刺して世事を論ず
有力未免遭驅使　力有り　未だ駆使に遭うを免れず。

石洪と温造はそれぞれ洛水の北と南に居を構えた山人、李渤は嵩山の少室山に居した山人である。いずれの地も韓愈の理想とするところである。彼らは世事を鋭く批評する豊かな見識をもっていたがために、俗界の引き抜くところとな

る。時には大大的に迎えられ、時には自分に高値を付けて求めに応じなかったという。そして韓愈は、「駆使に遭うを免れず」と言い、彼らを諷刺する。山人としての生き方を歪めた彼らへの非難である。

この非難よりすると、韓愈には逆に善しとする出仕の基準があったことになる。今、この点について考えてゆきたい。第三に名を列ねた山人李渤。韓愈はこの人物を元和四年に訪問している。ちなみにその時の交遊については、「嵩山天封宮題名」（校注、遺文）及び「謁少室李渤題名」（校注、遺文）により、その一端がわかる。

李渤とは詩に「価を索むること高く、両たび諫官を以て徴せども起たず」と見える如く、自らを高く持していた人。『新唐書』（巻一百一十六）李渤伝（列伝第四十三）に引く推薦を辞した彼の上書[6]も、彼が誇り高き人であったことを伝える。

韓愈はこの李渤に対して「與少室李拾遺書」〔少室の李拾遺に与うるの書〕（校注、外集上巻）という書簡を書いた。今その一部を読むことにする。

昔者孔子知不可爲而爲之不已、足跡接於諸侯之國。卽可爲之時、自藏深山、牢關而固距、卽與仁義者異守矣。想拾遺公冠帶就車、惠然肯來、舒所蓄積、以補綴盛德之有闕遺、利加於時、名垂於將來、踊躍悚企、傾刻以冀。又竊聞朝廷之議、必起拾遺公。使者往若不許、卽河南必繼以行、拾遺徵君若不至、必加高秩、如是則辭少就多、傷於廉而害於義、拾遺公必不爲也。善人斯進、其類皆有望於拾遺公、拾遺公儻不爲起、使衆善人不與斯人施也。由拾遺公而使天子不盡得良臣、君子不盡得顯位、人庶不盡被惠利、其害不爲細、必望審察而遠思之、務使合於孔子之道。

昔、孔子は、実現できないのを承知の上で努力をして惜しむことなく、その足跡は諸侯の国に近づきました。行動が必要な時に、自分から奥深い山に隠れてしまい、戸じまりをして堅固に世間から隔たっていたら、仁義の者とは

操守を違えることになります。わたくしの考えでは拾遺公が官吏となって迎えの車に乗り、好意的にこちらに足を運んで、豊かな見識を舒べて盛徳の欠点を補って下さるなら、利は今の時代に加わり、名声は将来にまで伝わることと思われます。是非とも早急にいらっしゃって下さい。朝廷の詮議では必ずや拾遺公を推挙するだろうともひそかにうかがっています。使いの者がそちらに出向いて、もし聞き入れられませんでしたなら、わたくし河南県令の韓愈が、必ずひきつづいてうかがいましょう。拾遺公が徴されてもこちらにいらっしゃらないことになれば、必ず秩禄は高く増やされることになります。そうなると、少ない方を断って多い方にとり入ることになり、また、つましさを傷つけて義を害することにもなりますが、拾遺公ならきっとそうはなさらないでしょう。善人の身の振り方、その手本を誰もが拾遺公に期待しています。拾遺公がもしお起ちになれませんと、多くの善人たちはあなたとともに活躍することがありません。拾遺公のために天子は必ずしも良臣を得られず、君子は必ずしも高位につけず、人々は必ずしも恵を受けられません。その損失は大きいものです。必ずや御明察と遠大な配慮によって、孔子の道にふさわしいものとなるようにして下さい。

このころ有用な人材を抜擢する立場にあった韓愈は、この書簡によって朝廷に出向かない李渤を説得した。書簡の主旨は、隠者であっても時宜を得て行動をすべきであり、それはつましさを忘れず仁義に基づくのが望ましいというものである。ここで所謂る孔子の道に仕官の在り方を求めている韓愈には、仕官と隠居、そのいずれか一つのみを選択するという偏向性は認められない。また、隠から吏へと転じる行為そのものが否定されているのでもない。要するに書簡では、隠者が仕官をする際のバランス感覚が問われているのである。吏と隠との狭間に立たされた山人李渤。彼の出仕は山人としての修養を積んだ割には過剰な条件を提示したものであった。ここではそういう李渤に対する吏隠の狭間に於

ける善処の仕方が示されているのである。

山人李渤の身の処し方は、おそらく韓愈の交遊者の中にあっても極端な例であろう。だが、それに対応して、包み込んでしまう奥行きの深さが韓愈にはあったということになる。

前掲の詩「寄盧仝」の中で、続け様に出仕してしまったという石洪と温造。彼らはともに時の河陽軍節度使であった烏重胤の引き抜くところとなる。その事状について韓愈は、元和五年に書かれた「送温處士赴河陽軍序」〔温処士の河陽軍に赴くを送るの序〕（校注巻四）の中で次のように伝える。

東都固士大夫之冀北也。恃才能深藏而不市者、洛之北涯曰石生、其南涯曰温生。大夫烏公以鈇鉞鎮河陽之三月、以石生爲才、以禮爲羅、羅而致之幕下、未數月也、以温生爲才、於是以石生爲媒、以禮爲羅、又羅而致之幕下。

東都洛陽こそは士大夫の冀北である。才能に自信を持ち深くしまい込んで売りに出さなかった者に、洛水の北岸に石洪君というのがおり、南岸に温造君というのがいた。御史大夫烏重胤閣下は、将軍のしるしの鉞（まさかり）を賜って河陽の節度使となって三月目に、石洪君を才能があると認め、礼を網として、網にとらえて幕僚のなかに招き寄せてしまった。それからいく月もたたないうちに、温造君を才能があると認め、そこで石洪君を仲介者として、礼を網とし、又た網にとらえて幕僚のなかに招き寄せてしまった。

文章中に特異な言い方が見える。「礼を以て羅（あみ）と為して、羅して之れを幕下に致す」これは、才能ある石洪と温造も所詮少し多めの礼物に屈してしまったということへの皮肉である。二人の仕官の在り方に対する韓愈の見方は、前掲の詩「寄盧仝」では「鞍馬僕従、閭里に塞がる」と表わされ、また、詩「送石處士赴河陽幕」〔石処士の河陽の幕に赴くを送る〕（集釋巻七）では「長く種樹の書を把（と）って、人は云う世を避くるの士と。忽ち將軍の馬に騎（き）して、自ら報恩の子と號

す」と表わされる。前者は出仕の不相応、後者は隠者としての鞍替えの速さを諷刺したものである。これらの詩文ではいずれも李渤の場合と同様に出仕の姿勢が問題とされているのである。

礼物の前に隠者としての判断力を欠き、強く心がそそられるままに出仕してしまったかのような石洪と温造。そうした彼らの中に韓愈が見たものは、おそらく確固たるものを持たずぐらつく姿勢だった。しかし、韓愈は彼らを冷静に見据えて対応している。

このように、石洪、温造、李渤らの仕官の姿勢を問題視し譲ることのなかった韓愈を見る限り、彼は、漸く実現を果した洛陽の生活に於いても、自分の価値観の中での言動を試みていたものと考えられよう。

ところで、温造について、『新唐書』（巻九十一）温大雅列伝（列伝第十六）の附伝では次のように見える。

造、字は簡輿、姿表は瑰傑、性は書を嗜（たしな）む。然れども盛氣ありて、降屈する所少し。吏と爲るを喜ばず、王屋山に隱る。人は其の居を號して處士の墅と曰う。

この叙述は『旧唐書』（巻一百六十五）温造列伝のものとほぼ同じである。しかし、『旧唐書』では隠居のところを「王屋に隠居し漁釣逍遙を以て事と爲す」といい、また、『新唐書』の「處士の墅」という表現は見えない。つまり、『旧唐書』では温造の山人としての側面が強調されて書かれ、『新唐書』では彼の処士としての側面が強調されていることになる。

石洪について『新唐書』（巻一百七十一）烏重胤列伝（列伝第九十六）の附伝では次のように見える。

石洪なる者、字は濬川、其の先、性は烏石蘭、後に獨り石を以て氏と爲せり。至行有り。明經に擧げられ、黄州の錄事參軍と爲る。罷（や）めて東都に歸り、十餘年隱居して出でず。公卿數々（しばしば）薦むるも、皆な答えず。

ここでは石洪が『新唐書』の編者である欧陽修らによって「至行有り」と評価されている。石洪には非常に立派な行いがあったと見られているのである。

しかし、欧陽修は個人的には石洪を認めていなかったらしい。

石洪は處士と爲りて名當時に重んぜられし者、以て常に韓退之の爲に稱道せられれば也。唐の世、處士と號す者少なからずと爲す矣。洪、終始他に人に稱せらる可き無き者。而るに今に至るまで其の名獨り人の耳目に在るは、韓文の世に盛行するに由る也。而して洪の爲す所、韓の道と同じからずして勢いは相い容れざる也。（『欧陽文忠公文集』に収める『集古錄跋尾』の「唐石洪鐘山林下集序」に依る）

欧陽修の評価は厳しく、処士として石洪を見た場合に、彼を全面的には認め難い人物としている。石洪は隠にして隠に非ず、吏にして吏に非ずという二面的な性格をほしいままにし、山人としての修養の片も感じさせない人物と映るが、彼を処士として扱う場合にも問題があると欧陽修は考えていたようである。そして石洪の行為を韓愈の道と異なるものとしている。

清の曽国藩も石洪に対して「石處士の名、殆んど能く一世の人を傾く。而るに韓公甚だしくは之れを許さず」（『求闕齋讀書錄』集部に収める『韓昌黎集』「集賢院校理石君墓誌銘」の評語）という。

このように、正史に於いては、温造に対する見方が異なり、また、欧陽修、曽国藩らの諸家は石洪に対して辛い見方を示しているのであるが、これらはいずれもこの山人たちの吏隠の狭間に於ける姿勢が、韓愈のそれに適っていないということに起因しているのである。

そして韓愈自身の石洪、温造らの意外な出仕に対する感慨は次のものであった。

愈縻於茲、不能自引去、資二生以待老、今皆爲有力者奪之。其何能無介然於懐邪。

わたくし韓愈は、この土地（洛陽）の官職にしばられて、自分から引退することもできず、二君をたよりに老いゆこうとしたのが、いま、どちらも権力ある人に奪い取られた。心中、しこりをなくしようとしてもできないことである。

これは前掲「送温處士赴河陽軍序」に見える終りの部分である。ここでは石洪と温造が全く否定されているわけではない。「二生に資って以て老いを待つ」との言い方の中には、むしろ好意的な私情が打ちあけられている。しかし、彼らの出仕については「懐いに介然たる」という。つまり心にしこりが残ったというのである。

心に残ったしこりの存在。これは韓愈には吏隠の狭間に於いて基準があったことを逆に裏付ける。その基準とは既に明らかであるが、つましさを忘れずに、しかも仁義に悖ることの無い孔子の道である。洛陽を離れていても培っていた精神の自律は、こういう形で生きつづけたのだろうか。いずれにしても、共感を覚えて敢えて接近した山人たちの身の振り方に対しても、韓愈は迷うことのない尺度をもっていたことは事実である。

三人の山人の中でも、石洪との交遊はとりわけ緊密な観があるだけに、その急な転身ぶりに対応する韓愈の強固な内面的姿勢の存在を逆に推測させる。石洪との交遊の足跡を知るものとして二つの題名がある。今、それを列挙する。

韓愈退之、李翺習之、孟郊東野、柳宗元子厚、石洪濬川同登。「長安慈恩塔題名」（校注、遺文）

處士石洪濬川、吏部員外王仲舒弘中、水部員外鄭楚相叔敖、洛陽懸令潘宿陽乾明、國子博士韓愈退之、前試左武衛胄曹李演廣文、前杭州錢塘懸尉鄭紘文明、元和三年十月九日同遊。「福先塔寺題名」（校注、遺文）

前者は長安に於けるものであり、後者は洛陽に於けるものである。二つの題名によって韓愈と石洪の交遊の舞台の広

がりがわかる。現在韓愈の題名は七つ伝わるが、その中で唯一石洪のみがこのように二度その名を韓愈とともに題されている。このことは、名勝に於ける二人の交遊の機会が豊富であったことを示唆するものである。二つの題名に見える他の交遊者の顔ぶれから判断すると、前者は所謂る韓門の中に打ち解ける石洪を示しており、後者は洛陽に集える名士の一人としての石洪を示していると言えるだろう。

次に、韓愈の石洪に関する詩文を列挙すると「送石處士序」（校注巻四）「送石處士赴河陽幕」（前掲）「祭石君文」（校注外集上巻）「集賢院校理石君墓誌銘」（校注巻六）の四作品にすぎない。これは李渤と温造に関するものが「與少室李拾遺書」（前掲）「送温處士赴河陽軍序」（前掲）というそれぞれ一作品にとどまっているのと同様に多いとは言えない。しかし、石洪の場合には、他の二者とは異って祭文と墓誌銘が書かれており、この点は注意すべきである。

韓愈が姻戚関係にない人物に対して祭文と墓誌銘との二文を書くことは極めて稀であった。今に伝わる二十五篇の祭文と七十四篇の墓誌銘を以てしても、わずかに五例を数えるにすぎない。この選ばれた人物の中には柳宗元や張署[7]などがいるが、彼らと同じ扱いにされた石洪も、その意味で重要人物と言えよう。

二つの題名から想像される交遊、また、祭文と墓誌銘が残された意味合いからしても、石洪が韓愈の交遊者の中にあって、特異な存在であったことはほぼ間違いない。それゆえ、韓愈が洛陽に於いて自分の晩年を石洪をたよりながら送りたいと考えていたのも、全く根拠が無いわけでは無さそうである。

しかし、石洪は権力者の差し回しに軽々しく乗じ、洛陽を後にしていった。良き交遊者石洪を失うことは、おそらく韓愈にとって相当な痛手だったであろう。だが韓愈はそれにもかかわらず「懐いに介然たる」といい、心にしこりを残しながら冷静に石洪を見送る。それは、やはり吏隠の狭間に於ける譲れない姿勢を韓愈が崩さずに持っていたからであ

る。

四

第三章で掲載した「長安慈恩塔題名」に「韓愈退之、孟郊東野、柳宗元子厚、石洪濬川同登」と見える如く、石洪は韓愈以外の人ともふれあったらしい。とりわけ李翺とは親しかったのか、李翺が元和四年に嶺南節度使の幕僚となって洛陽を離れる際に、石洪は彼を見送ったという。[8] そして、韓愈もその場に居合せている。

韓愈の「送李翺」〔李翺を送る〕（集釋巻六）という五言古詩は、この時のものであるが、詩中に告白された感慨には、背景に山人石洪との交遊があると注意しなければなるまい。今その詩を読みたい。

廣州萬里途　広州万里の途
山重江逶迤　山は重なって江は逶迤たり。
行行何時到　行行何の時か到らん
誰能定歸期　誰か能く帰期を定めん。
揖我出門去　我を揖して門を出でて去る
顔色異恆時　顔色、恒時に異なれり。
雖云有追送　追送ありと云うと雖も
足跡絶自茲　足跡、茲自り絶ゆ。
人生一世間　人生一世の間

不自張與弛　張と弛とに自らざらんや。
譬如浮江木　譬えば江に浮ぶ木の如く
縱横豈自知　縱横、豈に自ら知らんや。
寧懐別時苦　寧ろ別時の苦を懐くとも
勿作別後思　別後の思を作すこと勿れ。

この詩は、先ず南方広州に赴く途中の山川行路の多難、また任地への到着とそこからの帰還の時期の定め難さを歌う。次いで送別の場面、門を出でて平生と異なる李翺、全ての別れがそうであるように、彼の姿も次第に遠のき、やがて視界から消えてゆく。この別離のいい知れぬ辛さの中で韓愈が歌ったもの、それは人生を長江に浮ぶ木にたとえた感慨であった。大河の奔流の中で或いは縱になり、或いは横になり、その行方を知る由もない姿こそ、まさに人の一生であると韓愈は見ている。

「江に浮ぶ木」が人を肉体的側面から見た比喩と考えれば、「張と弛」とは人の精神的な側面を言ったものであろう。この詩には心身ともに翻弄される人の姿が映し出されていると言えよう。もしこの詩に托された感慨が、元和初期の洛陽に於ける韓愈の実感であったとすると、山人たちとの交遊に於いて見せたあの強固な姿勢を持つ韓愈の姿とは別に、何か人間の空しさを感じていた韓愈の姿も浮び上がる。

確かに、山人たちとの交遊は、もとより隠居することのみを求めて行われたものではない。吏隠の狭間に於ける彼らの姿勢に対する韓愈の非難を見ても、それが経世の立場から行われており、また、吏としての有用性を追求するが故になされたものである。それゆえに彼らとの交遊は預め自己の立場を明確に自覚したものと言えるのであるが、こうした

結局隠者としては生きられぬという自覚が、韓愈をして人生を空しいものと思わせしめるのであろうか。

ともあれ、この「送李翺」という詩は洛陽で作られたものであるから、今少し韓愈と洛陽との関係を整理してみることにする。

韓愈の故郷は河陽（河南省孟県）にあったという。この地は洛陽にさほど遠くはない。韓愈自身も「寄崔二十六立之」（集釋巻八）の中で「舊籍は東都に在り」といい、故郷を洛陽の一部であるかのように表現する。

この洛陽の地理的性格ゆえに、韓愈のこの地との関わり方は実に様々である。彼の一生を俯瞰すると、洛陽は孤立した一定の期間のみ韓愈に関っていたのではなく、不定期に関っていたことがわかる。換言すると、洛陽は短期的時間の集積として彼の人生に意味をもたらしていた。

貞元年間に於ける韓愈の洛陽への出入はその典型であり、長安へ科挙の試験に赴く際、また、下第後に故郷に戻る際のいわば中継地としての役割りを洛陽は担っていた。彼の下第の回数の多さからすれば、彼はわざわざ洛陽に戻るために長安に赴いていたとの見方もできよう。そう言える程このころの洛陽への出入は多かったのである。

洛陽を通過点として長安へ頻りに赴く様子は、韓愈の上昇志向を殊に印象づけるが、逆に洛陽はそのために影が薄い地となっている。しかし、洛陽は彼の郷里にほど近く、本来ならば郷里に於いて見られるはずの感慨が、この地に於いて代弁されるという重要な場となっている。すなわち洛陽では彼の下降する感慨と志を回復する感慨とが交錯するのである。貞元十七年に作られた「山石」（集釋巻二）や「贈侯喜」（集釋巻二）という詩に表われたものはその最たるもので、これらの詩には、人の世に拘束されながらも、洛陽の自然とのふれあいの中で英気を養い新たな処世への意欲をもつ韓愈の姿が見える。

総じて、洛陽は韓愈にとって現実を見据える良き機会を提供された場と言えるが、それと同時に、人生の推移を予感した場でもあった。

その象徴的な出来事が董晋との出逢いである。貞元十一年、韓愈は就職運動のために賈躭(かたん)などの三人の宰相に書簡をおくった。しかしいずれも聞き入れられず、彼は洛陽に出ることになる。そして東都留守であった董晋の知遇を得た。これが契機となって翌貞元十二年に董晋が汴州（河南省）の宣武軍節度使となるのに従い、その幕僚として仕えることになる。この仕官は韓愈の生涯に於けるいわば最初の転機であった。

凡そ三年、韓愈は汴州において幕僚暮らしをするのであるが、次の赴任地が徐州（江蘇省）に決まるのも、その契機は洛陽に於いてであった。

貞元十五年二月、董晋の死没後、韓愈はその葬列に加わり汴州から洛陽へと向う。そしてその四日後に汴州に於いて反乱が起こったという。李翺はそのときの様子について「晋卒し、公、晋の喪に従いて以て出で、四日にして汴州亂る。凡そ従事の居せる者、皆な殺死さる」(9)と伝えるが、韓愈は折よく洛陽へ向っていたためにこの難を逃れられ、生命を維持できた。妻子も幸いに徐州へ逃れたとの知らせを洛陽の近郊で聞き(10)、彼はすぐに徐州へと向う。その結果、韓愈は徐州に於いて張建封の幕僚となった。

このように韓愈が汴州と徐州に至った経緯を見ると、いずれも洛陽が深く関っていたことがわかる。また折々の韓愈の身の振り方が自己の意志を越えるものによって左右されていることから、貞元年間の洛陽には韓愈の運命を翻弄してきたとの意味合いがある。

この点を踏まえて再び「送李翺」の詩を顧ると、そこで告白された「人生一世の間、張と弛とに自らざらんや。譬え

ば江に浮ぶ木の如く、縦横、豈に自ら知らんや」という四句には、韓愈の貞元年間に於ける体験、すなわち洛陽に於いて運命に弄ばれてきたという体験が托されていると考えられる。嘗ての体験がいわば伏線となってこの詩に活かされているのである。しかし、この詩に見える感慨が貞元年間の体験のみに依るものではなく、また、それが元和初期に於ける殊に顕著な韓愈の感慨を代表するものであると考えられるのは、次の文章によって明らかである。

それは元和五年に書かれた「送湖南李正字序」〔湖南の李正字を送るの序〕（校注巻四）という文章である。この送序は李礎という人物が湖南に再び幕僚として赴任するのを送ったものである。今、その主な部分を読むことにする。

貞元中、愈従太傅隴西公平汴州。……中略……公薨軍亂、軍司馬従事皆死。侍御亦被讒、爲民日南。其後五年、愈又貶陽山令。今愈以都官郎守東都省。侍御自衡州刺史爲親王長史、亦留此掌其府事。李生自湖南従事請告來覲。於時太傅府之士、惟愈與河南司録周君獨存。其外則李氏父子、相與爲四人、離十三年、幸而集處、得燕而擧一觴相屬。此天也。非人力也。侍御與周君、於今爲先輩成德。李生溫然爲君子。有詩八百篇、傳詠於時。惟愈也、業不益進、行不加修、顧惟未死耳。……

貞元年間、私は太傅・隴西公董晋閣下が汴州を平定されるのに従った。……中略……董晋閣下が亡くなられると軍隊が反乱を起し、行軍司馬陸長源閣下と属官はみな死んだ。父君の侍御史李仁鈞どのも讒言されて、日南地方の民を治めた。その後五年たつと、私も陽山の県令に降任させられた。現在私は都官員外郎の任に在り東都洛陽勤務をしている。父君の侍御史李仁鈞どのは、衡州刺史から親王府の長史となり、やはりこの地で親王府の事務をしておられる。李礎君は、湖南観察使の属官から休暇を申請して来られた。このとき太傅董晋閣下の役所にいた官吏は、ただ私と河南府司録参軍の周原君のみが生存している。その他は李氏の父子であって、あわせて四人、別れて十三

年になるが、幸運にもともに集まり、宴会を開いて少しばかりの杯をとりあげて勧め合うことができる。これは天命である。人の力ではない。父君の侍御史李仁鈞どのと周愿君とは、現在年長の徳の備わった人となった。李礎君は温厚な人格者となった。詩が八百篇もあり、当世、口にうたい伝えられている。ただ私だけが、学問には進歩がなく、徳行にも修養を積まず、ただ死んでいないだけである。……

文章中、送別の宴席に於ける主人公の李礎は、韓愈の汴州時代の交遊者とされる。洛陽に於けるこの李礎との再会が、韓愈をして過去への回想に導く。別離の私情もこの回想の中にうちとけ、さほど表立って離別の苦を感じさせていない。

回想は韓愈が董晋の幕下に入った時からのものである。簡略ではあるが、自己の略歴と李氏父子の今に至るまでの経緯とを折りなして昔をふり返る。ふり返ってみると、今この洛陽に集まった当時の官吏は、ただの四人のみ。天命による幸運な再会と思えるだけに「惟だ愈と河南の司録周君のみ独り存せり」などと韓愈は言う。

しかし、生存の自覚が逆に韓愈に重くのしかかっていく。そこで現在の自分を凝視する韓愈。他の三人は与えられた生の中でそれぞれ成果をあげているが、自ら(みずか)を顧みると学問徳行ともに見劣りするという。このもどかしさが「顧みるに惟だ未だ死せざるのみ」という虚無的な言い方を生んだ。

一体、これはどうしたことであろうか。ここに見える投げやりな姿勢は、山人たちに向けられたそれとは明らかに異なるものである。これが隠者としては所詮生きられず、官吏として生きることの宿命を自覚した韓愈の空しさの告白なのであろうか。そうは言えないにしても、この文章の虚無的な発言には、詩「送李翺」に於ける「人生一世の間……譬えば江に浮ぶ木の如く……」という人間を微力な存在と見る句に一脈を通じるものがあるわけであり、これもまた元和初期の洛陽に於ける韓愈の率直な気持ちの一端であることは確かなようである。

五

結局、韓愈は、元和年間初期の洛陽に於いても、自己の吏隠の狭間での姿勢を崩すことはなかった。但だ既に四十の齢を越えた韓愈にあっても、自己の運命はさすがに捉え難いものであったらしい。

それゆえ、天命に自律した精神を求めてきたとはいえ、彼も、この期に於ける強烈な個性を持った山人たちとの交遊を通して、自己の既成の姿勢を時には自ら否定的に眺めてみる機会がおそらくあったかと思われる。

しかし、そのことが行為として現れることはなかった。むしろ先に見た詩文の如く、鬱屈した形で示され、時には虚無的な言い方とともに自らの半生が語られている。だが、それが、韓愈にとってきわめて特殊な意味を持つ洛陽という場に於けるものであるだけに、いささかの不思議も私は感じていない。

但だここで言えることは、自己の不満が詩文に露骨にぶつけられることで多少の解消を見、そのことが韓愈自身の基本的な処世態度に危機をもたらしていないということである。このことは、恐らく元和初期に於ける場合に限定はではないにしても、ここに韓愈の処世、生き方の典型を見出せると私は思う。

注

(1) 前野直彬・斉藤茂著『韓退之』一九八三年集英社の「韓退之年譜」元和二年の記述に依る。

(2) 『李文公集』巻十一行状實録三首の第一首「故正義大夫行尚書吏部侍郎上柱國賜紫金魚袋贈礼部尚書韓公行状」の文章中に「入爲権知國子博士、宰相有愛公文者、將以文學職處公。有争先者、構公語以非之。公恐及難、遂求分司東都。」とある。

(3) 『韓子年譜』の元和二年の記述には「公分教東都生、正以避傍爾」とある。
(4) 本稿に於ける韓愈の文章の日本語訳は主に清水茂氏の『韓愈』I II筑摩書房一九八六を参考にして作成した。
(5) 韓愈詩の書き下し文は、久保天随の『韓退之詩集』上下（「続国訳漢文大成」文学部）を主に参考にして作成した。
(6) 『新唐書』に於ける李渤の上書の原文は「昔屠羊説有言『位三旌、祿萬鐘、知貴於屠羊、然不可使君妄施』彼賤賈也、猶能忘己愛君。臣雖欲盗榮以濟所欲、得無愧屠」なお、屠羊説の言辞は『荘子』讓王篇に見えるものである。
(7) 張署のことに関しては拙稿「韓愈に於ける人間存在への思惟の深化——張署との交遊に関する詩文より見て——」『藝文研究』第五十七号一九九〇年三月を参照されたい。
(8) 『李文公集』巻十八雑著八首の第一首「來南錄」の文章に「四年正月巳丑、自旌善弟以妻子上船於漕。乙未去東都、韓退之、石濬川假舟送予。」と見える。
(9) 『李文公集』巻十一行狀實錄三首の第一首「故正義大夫行尚書吏部侍郎上柱國賜紫金魚袋贈礼部尚書韓公行狀」に見える記述。
(10) この時の詳細な様子は韓愈の「此日足可惜一首贈張籍」（集釋巻一）という詩に見える。